

よしじまけじゅうたく
吉島家住宅

明治40年(1907)に建てられた建物です。明治8年の大火と明治38年の類焼で建物が焼けましたが、腕の良い大工である西田伊三郎や内山新造たちにより再建しました。吉島家は、江戸時代から生糸、繭の売買、金融、造り酒屋などをして、お金持ちの商人になっていきました。

大黒柱を中心に梁と束によって構成される吹き抜けの広さに驚きます。天窓からの太陽光をうまく屋内に取り入れ、柱や戸の木目を美しく見せています。とても大きな建物で、量のある部屋だけでも20近くあり、その他に土蔵が3つあります。また、火垣という防火のための塼もあります。



越中街道

高桑家住宅

越中海道 鍵の手

くさかべみんげいかん
日下部民藝館

江戸幕府が飛騨を直接治めた天領時代、日下部家はその御用商人として栄えた商家で、屋号を「谷屋」といいました。

当時の邸宅は明治8年(1875)の大火で焼失し、4年後の明治12年に大工の棟梁 川尻治助が完成させたのが現在の建物です。主屋は、切妻造り段違い二階建て、一部吹き抜けの総檜造り、梁と束の木組みが力強く構成されており、屋根の勾配はゆるく、軒の出は深いのが特徴です。量が全部で147畳も敷いてある大きな商家です。治助は、江戸時代には規制によって建築できなかった棟の高い二階建ての様式を見事に作り上げました。



たかやままつり やたいかいかん
高山祭屋台会館

高山祭屋台会館は秋の高山祭に曳き出される屋台11台を4ヶ月ごとに入れ替えて展示している施設です。

屋台は国の重要有形民俗文化財に指定されています。これらの屋台は、江戸時代に飛騨の匠が精魂傾けて製作に当たり、以来屋台組の人々に大切に守られてきました。屋台は約50年に一度、大修理・解体修理が行われてきました。その度に、先人の技と知恵に触れ、たゆみない匠の努力と屋台組の人達の屋台への思い入れにより受け継がれてきました。これからも残していかなければならない、人々の気持ちを一つにするものとなっています。

子ども達に「伝建地区や景観保存区域の歴史や伝統文化を学んでもらおう」と、各所をスタッフをもらいながら観て巡る催し物が昨年9月29日に行われました。今回で7回目を迎えます。

主催/子ども伝承部会
共催/岐阜県建築士会飛騨支部
後援/高山市・高山市教育委員会
次のページで、子ども達が残してくれたアンケートの一部を紹介します。

しもちよう
下町発見

朱印

さくらやまはちまんぐう
櫻山八幡宮

櫻山八幡宮の神さまは、第15代の応神(おうじん)天皇です。はじまりは、およそ1600年前だといわれます。第16代の仁徳(にんとく)天皇の時代、飛騨で暴れていた両面宿儺(りょうめんすくな)を討伐するために、武振熊命(たけふるくまのみこと)が兵を率いてきました。討伐の戦勝祈願に、応神天皇の御神霊をお祀りしたのが、櫻山八幡宮のはじまりです。

400年前、高山領主 金森重頼(かなもりしげより)公が、荒れていた神社を立て直し、飛騨が幕府直轄の天領となっても、代官や郡代が信仰をささげてきました。300年前には、屋台を曳き廻す八幡祭が盛んにおこなわれるようになりました。



飾り物 (@映芳寺)

かざりもの
飾り物

日本中で高山にだけ息づいている「飾り物」は、天明8年(1787)、高山代官 大原正純が飾り物を稲荷神社に奉納したのが一番古い記録として残っています。飾り物は、祝い事に際して、各町内の保存会や愛好する市民によって行われています。「作り物」「判じ物」「見立て物」の3種類がありますが、「見立て物」がもっとも優れています。道具はなるべく同系統のものを使い、しかもごく自然にありのままの姿で、ある目的物を考えさせる「見立てる」を良しとします。オブジェ感覚の競い合いといえます。この伝統を永く残していくことは、市民の喜び、誇りであり、努めてはならないでしょうか。

高山別院